

楊大眼的耳讀法

北基行 記

北京 老舍茶館の人形飾り 講話を聴く庶民たち

楊大眼の耳讀法

眼を使わずに耳で読書が出来るか？ まさかそんな話、聞いたことが無い。それが、事情によりけりながら、出来るのだ、しかもそれが無いと困る人もある。

耳読書を発明した人をご存じか？ 正確に考証せよと言われると困るが、思い切ってその名を挙げると、楊大眼と呼ぶ人である。とりあえず彼に、耳読書の代表者になってもらうことにする。

楊大眼は中国古代の一將軍である。五世紀末から六世紀初めといえ、南北朝時代であるが、ちょうどその頃の北魏の猛將で、連戦連勝、武名を天下に靡かせた。『魏書』卷七十三及び『北史』卷三十七に彼の列伝が建てられているから、相当な人であつたらしい。『北史』によると、“大眼は学ばずと雖も、恒に人を遣い、書を読ませ坐して之を開き、悉く皆記識す。露布を作らしむに、皆口で之を受け、而して竟に識字すること多からず。”これによると、字を書くことが出来ず、教育程度でいえば文盲の仲間に教えられるが、人が読む書は聴きとることが出来、布告の文章を口授することも出来た。彼の能力はたいしたものである。これに首をかしげる人もいるだろう。

平素の生活とかけ離れた内容であれば、聞き取り難いであろう。読んでいる書が、自分のよく知る内容のものであれば、例えば、軍隊でよく見かける、兵書、戦況報告、命令、布告等は、声を出して読めば普通の軍人は聴きとることは容易だ。こう考えると、じつはこれはそれ程難しいことではなかったかもしれない。

とはいえ、楊大眼のこの種の読書方法は、あまり字を知らないが、多くの書類を見なければならぬ人にとっては、有効な手段であると思う。この種の読書法はおもに耳で他人の読む書を聴くのであるから、このような方法を「耳読」法と呼んでよからう。これは有効な読書法の一つである。

この種の方法を耳読法と呼ぶ、もう一つの理由は、“聴読”と区別する必要があるからである。晋代王嘉は『拾遺記』の中で、故事を紹介してこのようにいっている。“賈逵年六歳にして、其の姉鄰家に読書を聞き、日々に逵を抱いて籬に就き之を聴かしむ。逵年十歳にして、乃ち六経を誦読す。父曰く、我未だ嘗て汝に教えざるに、安んぞ三墳五典を得て之を誦すか？ 曰く、姉嘗て予を抱きて籬に就き読むを聴き、因りて記え得て之を誦す。”この種の聴読と前に述べた耳読とは異なる。聴読は読む声を聴いて暗誦するもので、理解が伴うかどうか分からない。ところが、耳読は、読むはしから内容を理解していくもので、ここが聴読と違う価値あるところだ。

耳読は年を取って本が読めなくなった人にも、助けとなる良い方法である。宋代楼昉が『醉翁寤語』に一篇の故事を紹介している。“孫莘は老いて読書を喜べども、晩年目を病う。乃ち卒伍の中より識字やや事解する者二人を択び、授くに句読を以てす。瞑目に室中に危坐する毎に、二人に命じ旁に更り読ましむ。”この耳読例は、眼病を患い書が読めなくなりやむなく始めたものであるが、その他の原因で、書を見ることが出来なくなったときに、この方法の応用が生きるだろう。

現代の大政治家は、限られた時間内で、書類の山、報告、文献、資料等を閲読処理せねばならない。政治家といえども三面六臂ではないから、一般の資料や文献は、何人かの秘書に依頼手分けして、中でも重要なのは択んで何度か読み返させようえ、処理せざるを得ない。この点に焦点をあわせると、あながち楊大眼の耳読法も遅れた方法だったとは云えないかも！

【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

『楊大眼的耳讀法』ひとそえ

大河ドラマ『麒麟が来る』の時代より前から、祐筆（右筆）という職分があり、武將に代って代筆・作文そして代読も務めていたようです。武將は署名と花押をサインするだけで威厳を保っていたのでしょうか。高名な武將のなかには自分の花押さえ祐筆に任せた人もいたとか。「武」の人は、戦で忙しいから、決まった書式が煩わしいから等の理由があるのでしょうか、実際には読めない書けない「武將」や「將軍」がかなりいたと想像します。

ましてや、5世紀から6世紀初めの南北朝時代に活動した楊將軍が「耳読」で用を足したとして何ら不思議ではありません。「文」の人に読み書きを任せるのは、ある意味では分業に則り、職種を増やした合理的な手法かも知れません。

1949年の時点での中国の確かな識字率は知りません。ただ、雑誌『求是』で知った1949年と2019年の70年間の社会変化を数字で追ったリスト（農村人口、小中学校、専門学校、大学、留学生、貧困層、公道距離、鉄道距離など多数）から想像すると、現在の眼で事を判断することがためらわれます。おそらく、1949年当時の識字率は20%以下だったのでないでしょうか？

作者の鄧拓は出身、経歴からして「文」の人であり、「武」出自の大政治家が秘書や通訳たちの官房官僚任せの「耳読」になっていることを苦々しく思っていたことでしょう。

楊將軍の南北朝時代から1500年過ぎた新中国建設の頃にも依然として「耳読法」が横行しており、それどころか現在の中国や日本でも「耳読法」が珍重されているのかも知れません。

井上邦久

楊大眼的耳讀法 原文

读书能用耳朵来代替眼睛吗？一般说来，这是不可能的；但是在特殊的情况下，这不只是可能的，而且是必需的。

谁发明用耳朵读书的方法呢？要详细做考证就很麻烦。在这里，我想举出杨大眼，把他作为用耳朵读书法的人们的代表。

杨大眼是中国古代的一位将军，生当公元五世纪末和六世纪初。那时候正是南北朝时期，这个北魏的骁将屡战屡捷，威名大震。《魏书》卷七十三及《北史》卷三十七都为他立传。据《北史》载称：“大眼虽不学，恒遣人读书而坐听之，悉皆记识。令作露布，皆口授之，而竟不多识字也。”看来这个人的本领真不小。自己认不得多少字，论文化程度还不曾脱离文盲状态，却能听懂别人读的书，又能口授一通布告的文字，这不是很奇怪吗？

其实这并不太困难。如果所读的书是自己比较熟悉的内容，例如在军队中常见的兵书、战报、命令、文告等等，念起来大概一般军人都容易听得懂。假若读的是自己平素完全生疏的内容，那大概就很难听懂。

但是，杨大眼的这种读书方法，对于一个识字不多而工作上又迫切需要阅读很多文件的人，我想是有实际效果的。这种读书的方法，主要是依靠用耳朵听别人读书，所以这种读书方法可以叫做“耳读”法，它是很有用的一种读书方法。

把这种读书方法叫做耳读法，还有一个理由，就是要区别于所谓“听读”。晋代王嘉的《拾遗记》中也有一个故事说，“贾逵年六岁，其姊闻邻家读书，日抱逵就篱听之。逵年十岁，乃诵读六经。父曰：我未尝教汝，安得三坟五典诵之乎？曰：姊尝抱予就篱听读，因记得而诵之。”这种听读和前面说的耳读不同。因为听读只是随声诵读，并不一定懂得；而耳读是真正懂得所读的内容，所以说值得重视的是耳读而不是听读。

耳读的方法对于老年不能看书的人，同样也很适用。宋代楼昉的《醉翁寤語》一书记载了另一个故事：“孙莘老喜读书，晚年病目，乃择卒伍中识字稍解事者二人，授以句读，每瞑目危坐室中，命二人更读于旁。”

虽然这是因为眼睛有病不能看书才用耳读的方法，但是，我们不妨以此类推，设想其他的人也许由于种种原因，以致自己不能看书，就都可以采用这种耳读的方法。

事实上，我们知道现代的许多大政治家，往往要在很短的时间内，阅读和处理一大批书报和文件等等。他们既没有三头六臂，于是对一般的资料 and 文件，就只好由若干秘书人员分别帮助阅读和处理，而把最重要的字句念一两遍，如此看来，杨眼大的耳读法倒并不是落后的方法啊！